

地区医師会だより

名古屋市港区医師会

我が街港区は、名古屋市16区随一の広大な面積（約47km²）を有しますが、人口は8番目、医師会員数は15番目です（平成24年3月末でA会員68名、B会員46名、計114名）。今春の役員改選では、植村邦宏前会長が勇退し、新会長に今村修治先生が就任、副会長小島洋二先生（留任）、笠松正憲（新任）（筆者）とともに執行部の任にあたっています。また、名古屋市医師会に副会長として羽田野徹夫先生、理事に真野寿雄先生を送りだしています。

さて、港区休日急病診療所は昭和49年に名古屋市では4番目に開院しました。しかし、開設35年余り経ち、諸設備の老朽化も著しく、バリアフリーや感染症対策の必要性から、平成22年同所でリニューアルしました。医療崩壊が急速に進行するなか、第一次救急としての休日急病診療所の役割が見直されていることはご存知の通りですが、港区休日急病診療所は臨海地域にある診療所の使命として、いつ発生しても不思議でない東海・東南海・南海大地震に対しても、被災地医療拠点となりうる設計がなされています。同年3月27日、完成祝賀会を関係者のご支援・ご協力の下に盛大に挙行了しました。この紙面をお借りして改めて御礼申し上げます。

会員の関心事のひとつに、人口動向があります。東日本大震災前後の人口を比較すると＜震災前基準日：平成23年1月1日、後基準日：平成24年1月1日＞、■減少区 1. 港区（-1,481人） 2. 南区（-1,056人） 3. 北区（-922人） ■増加区 1. 緑区（+2,285人） 2. 中区（+1,075人） 3. 千種区（+1,031人）です。同期間に名古屋市全体の人口が微増である、港区の人口規模が14万7千人強であることを考えると、毎年千人以上が他地区へ流失する事実は、医療経営上厳しい現実を突き付けています。仮に震災や津波に対する不安で港区・南区といった臨海地域の人口が減っているとすれば、求められるのは住民不安の払拭です。高潮防波堤などの津波対策、河川堤防の震災対策、地域の液状化対策、避難場所の確保、災害情報の伝達方法など地元公職者の協力も得ながら早急に推進していかなければなりません。想定される有事に対し、休日急病診療所が被災地医療拠点として即応できるよう鍛えあげてゆくことが、港区医師会の課題と考えています。

最後に港区のお勧め行事『名古屋みなと祭』を紹介します。名古屋みなと祭は、名古屋港・名古屋港ガーデンふ頭一帯の夏祭りで、毎年7月第3月曜日の海の日に開催されます。昭和21年、戦争で痛手を受けた名古屋と名古屋港の復興を願い、人々を元気づけるために始まりました。多くの名古屋市民が楽しみにするのはご存知、夜の花火大会。しかし、本当のみなと祭はそれだけではありません。日中から地元町内会や子供会による屋形舟の形をした大きな山車や神輿など、太鼓や総踊りが練り広げられ祭りを彩っています。大阪の岸和田祭りをイメージしたと言われる、山車の屋根の部分に若頭が上り太鼓を叩く高六町内会や、太鼓と鐘を鳴らしながら派手に盛り上げる二号地西部町内会など、祭の隠れた目玉です。さらに特記すべきイベントは市の無形民俗文化財でもある『筏師一本乗り大会』（写真）。かつて、木曾の山から伐り出された材木は、木曾川で筏に組まれ、名古屋へと流送されました。江戸時代には年間約30万本の単材が筏に組まれ、筏流しが行われていました。今も、名古屋港西部飛鳥ふ頭野木場では筏師が集積された材木をさばいています。筏師30人余りが、海面に浮かべた材木の上で開港以来木材を扱ってきた独特な技術を披露する催しです。

来年の海の日には、是非昼間から『名古屋みなと祭』を訪れてはいかがでしょうか。

（文責：副会長 笠松 正憲）

